

Shorai Foundation
for Science and Technology

公益財団法人

松籟科学技術振興財団



公益財団法人 松籟科学技術振興財団 創立40周年を祝う



受領者懇談会 受領者からの感想

- ・受領者懇談会の場を設けていただき地方の若手研究者の私にとって大変刺激と励みになりました。
- ・選考委員の先生方からの評価ポイントや高みを目指すために必要な点をアドバイスいただけ重要な経験となりました。
- ・研究分野、年齢が近い研究者の方々と交流でき、とても良い機会となりました。
- ・懇談会での異分野の先生方との交流をきっかけに共同研究がスタートしました。
- ・今後の研究を推進するうえで、新しい出会いや考え方を活かしたいと考えます。
- ・若手研究者や著名な先生方との出会いにより、より強いネットワークが形成できました。
- ・異分野の個性的な先生方との交流は刺激的で、一層研究に邁進しようと気合が入りました。
- ・審査の講評を直接伺うことができ大変参考になりました。

2022年度 研究助成金贈呈式



創立40周年を記念して助成額を拡大しました。

松籟科学技術振興財団では、2023年3月9日に第40回研究助成金贈呈式を執り行いました。

2022年度は「植物有用成分およびバイオマス資源の高度利用」、「エレクトロニクス複合材料および次世代実装」、「持続可能な社会を実現する有機系新素材およびその機能化」を研究課題に、それぞれ37件、6件、25件（計68件）の応募があり、26件の研究テーマへの助成を決定しました。

毎年、優れた研究者に助成金を贈呈しています。そのなかには、ノーベル化学賞受賞者の野依良治 科学技術振興機構 研究開発戦略センター長や鈴木章 北海道大学名誉教授がいらっしゃいます。今回は、財団創立40周年を記念して、助成金上限を300万円に拡大し、26名の研究者に助成金を贈呈しました。これにより、助成金の累計は、延べ792名、総額8億7,090万円となりました。

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、4年ぶりの開催となった今回の贈呈式では、開始前に受領者同士の交流を目的とした懇談会が行われ、自己紹介や選考委員による講評がありました。贈呈式では、来賓を代表して、文部科学省 森見憲 研究振興局長より祝辞をご披露いただき、受領者を代表して、筑波大学 木下奈都子 助教よりご挨拶をいただきました。贈呈式に続いて、当財団監事の住田裕子弁護士より「未来に向かって一科学技術に期待」、中部大学 山本尚 教授により「ペプチドの革新的合成」と題して、記念講演をいただきました。

資源の無い我が国にとって科学技術の発展こそが世界に貢献できる道であるとの想いのもと、助成する研究の成果に期待しつつ、当財団は今後とも助成、奨励事業を通じて科学技術の発展、振興に貢献してまいります。



挨拶する 長谷川 吉弘 理事長



祝辞を述べる 文科省 森 晃憲 局長



選考結果を報告する 中條 善樹 選考委員長



懇親会で祝辞を述べる 渡海 紀三朗 議員



懇親会で乾杯の挨拶をする 中島 邦雄 理事



創立40周年を迎えるにあたり、財団関係者の方々から お祝いと激励のメッセージをいただきました。

野依 良治 氏

(科学技術振興機構研究開発戦略センター長)

長きにわたり、日本の科学技術研究を支えて来られた貴財団のご芳志に、発足間もない頃の助成金受領者(1986年度、第4回)の一人として、敬意と感謝を捧げます。すでに研究社会に確固たる地位を築いてこられました。この創立40周年の機会が、さらなる財団存在意義の創出を触発することを祈念しています。

榎 裕之 氏

(奈良国立大学機構 理事長)

松籟財団が40周年を迎えられたこと、お慶び申し上げます。財団創立者の長谷川末吉氏の自主技術開発への強い思いとそれを受け継ぐハリマ化成の皆様のご尽力により、約800名の研究者に支援されてきたことに感謝申し上げます。今後は、分野や組織や国の壁を越えた協力で人類と地球環境の持続性確保に努めたいものです。

山本 尚 氏

(中部大学先端研究センター 教授)

松籟科学技術振興財団創立40周年、本当におめでとうございます。研究とは様々な技術の絶えざる精進があつてこそですが、その際の財団の果たす役割は非常に大きなものだと思存します。私も以前、貴財団から助成金をいただいたことがあり、それが思わぬ大きな発展のきっかけになりました。この機会に改めて御礼申し上げます。

渡海 紀三朗 氏

(衆議院議員、元文部科学大臣)

公益財団法人松籟科学技術振興財団の創立40周年おめでとうございます。科学技術に対する助成財団としては比較的早い1983年から事業を開始され、40年にわたり事業を継続されたことは、科学技術政策をライフワークとする私としても共感するところであり、今後とも助成事業を通じて科学技術創造立国の実現への支援をお願いします。

理事長と受賞者から、ご挨拶をいただきました。



長谷川 吉弘

松籟科学技術振興財団理事長 (ハリマ化成グループ社長)

科学技術の発展こそ未来を切り開く原動力であるとの創立者の想いをもとに活動を続けてきた当財団は40周年を迎えることができました。世界のトップレベルにあった日本の科学技術は、米国やそれを追う国々と比べ、相対的に地位が低下していると懸念されています。当財団としては、今後も研究助成事業を続けることで日本の科学技術力を支える一助となりたい。

木下 奈都子 氏

第40回受領者代表 (筑波大学 助教)

害虫を早期発見する技術開発や研究を進めています。長期的なビジョンを基にした基礎研究への寛大な支援は、大変貴重です。この研究が日本の農業復興や持続可能な世界に貢献することを夢見ています。

創立40周年贈呈式記念講演



すみた ひろこ
住田 裕子 様

弁護士（元検事）

※当財団創設者と同郷、同窓のご縁により2006年より当財団監事に就任。

●経歴

1951年 兵庫県加古川市出生

1976年 司法試験合格

1977年 東京大学法学部卒業

以後、東京地検検事に任官し、法務省民事局付検事（女性初）として民法・商法・国際私法等の改正担当、法務大臣事務秘書官（全省庁初の女性）等を歴任。

1998年 弁護士登録

国の審議会として、内閣府男女共同参画会議議員、同総合科学技術会議基本問題専門委員、文部科学省・経済産業省・農水省・厚生労働省等の審議会委員を歴任。現在、防衛省中央防衛審議会会長、内閣府衆議院議員選挙区画定審議会委員、内閣府特定秘密諮問会議構成員等。

NPO法人長寿安心会代表理事

演題 未来に向かって—科学技術に期待—

我が国の現状は、長引くデフレと円安で経済が弱体化し、2022年度の国連統計では幸福度ランキングが149カ国中54位、女性の活躍度ジェンダーギャップ指数は146カ国中116位となり、労働生産性の低さも指摘されている。

政府では、令和3年に第6期科学技術イノベーション基本計画を発表したが、イノベーションによる労働生産性の向上、デジタル後進国の汚名返上に期待したい。このような状況において、公益財団法人は、その設立の趣旨から「ノブレス・オブリージュ」（仏: noblesse oblige）の精神で責任を果たすことが更に必要となっています。

科学技術分野では、現状の課題であるジェンダーギャップの一つとして理系女子学生の少なさが問題となっており、OECD加盟国中最下位である。高度成長期には問題とならなかった固定的性別役割分担意識が強固で、女性に対する家事への重い負担、社会における忖度により、進路選択時、上級職への昇進時の障害となっている。女性の社会進出への遅れは、多様性の乏しさにより新たな知の創出についても障害となっている。意識の改革が大切であり、本日ここに出席された女性研究者の方には次の女性を育てる助言者（メンター）になっていただきたい。まずは、意識の改革 固定的性別役割分担意識の打破から！

最後に、本日出席の皆様へのエールとして「日本から地球・人類への貢献を」自然科学者の皆様のご活躍を大いに期待しています。

受領者からの感想

- ・日本が抱える問題や問題解決に向けた現在の取り組みについて丁寧にお話いただき、研究者の立場からどのような貢献ができるか深く思慮を思い巡らしました。
- ・住田弁護士のパワフルな講演を拝聴できて良かったです。
- ・全く違う分野の方からの視点で非常に興味深かったです。



やまもと ひさし
山本 尚 様

中部大学

先端研究センター・ペプチド研究センター教授
名古屋大学名誉教授、シカゴ大学名誉教授

※1988年度（第6回）松嶺科学技術振興財団より研究助成金贈呈）

●経歴

1943年 兵庫県神戸市出生

1967年 京都大学工学部工業化学科卒業

1971年 ハーバード大学大学院化学科 博士課程修了

帰国後、東での勤務を経て、京都大学講師、ハワイ大学准教授、名古屋大学教授を務め、シカゴ大学化学科特別教授を経て中部大学教授に就任。

2007年 日本学士院賞

2016年 日本化学会会長

2017年 ロジャー・アダムス賞（米国化学会/受賞者の1/3がノーベル賞を受賞）

2018年 文化功労者他、受賞多数

演題 ペプチドの革新的合成

私は純正研究的な仕事、言い換えれば役に立たない研究を半世紀してきて、最後の十年、中部大学でイノベーションに一步でもつながる研究をしたいとの気持ちでペプチドの研究を始めた。ペプチドについては、余計な知識を持たない素人だったことが役に立った。従来のペプチド合成は固相合成が有名でその合成法について問題が無いと考えられていた。しかし、既存のペプチド合成は収量が少なく純度が低く価格が法外であり、大分子のペプチドではその価格の半分以上が最後の精製のための費用となっている。これでは科学技術ではないと思い、新たな合成法を考案した。

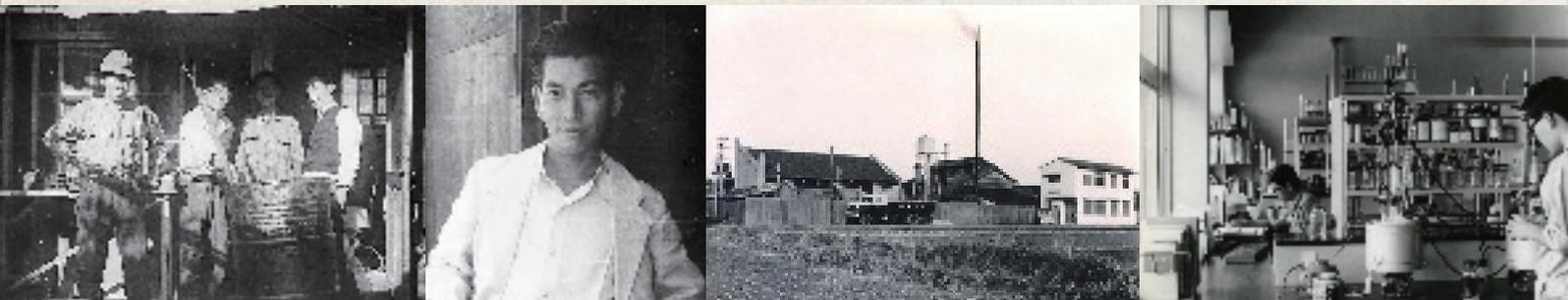
新合成法により次世代医薬品のエースと目されるペプチド創薬における日本の先導的位置を確保する。新合成法は、煩雑な工程が不要で、アミノ酸からペプチドを合成する。従来の工程の1/10以下の工程で合成でき、製造経費の圧縮で純度の高いペプチドが安価に入手できるようになる。とはいえ、原料のアミノ酸は高価で、合成・分析に必要な分析機器も高価であり、研究室としては多額の設備投資が必要で、政府に資金支援を申請しているところだ。また、どのような構造のペプチドに薬効があるのか確認する必要があり、そのためにも効率よく多種のペプチドを合成できる新合成法が有効となる。

今後、政府主導で多数の企業、大学が参画する共同研究体制を創設し、新合成法のキー分子となる数百種のジケトピペラジンをを用い、各研究室にてそれぞれが中分子ペプチドを合成し、網羅的に生成物を単離評価し、新たな創薬モダリティとして中分子創薬を日本の創薬戦略として育てたい。

受領者からの感想

- ・今なお新しい研究にチャレンジし、精力的に研究を展開されているお姿に心を打たれました。
- ・常に「尖った」研究を何十年も続けられており、こんな方が十人でもいらしたら世の中が相当変わるのではないかと考えさせられました。
- ・新しい分野に挑戦し、その分野の人が考えないようなことをやってしまう、そのような研究者の講演を生で聞くことができたのは光栄でした。

創立40周年を迎えた 松籟科学技術振興財団の歩み



日本だけでなくブラジルからも 認められた科学への貢献

1982(昭和57)年5月、播磨化成工業(現・ハリマ化成グループ)の設立者である長谷川末吉は科学技術庁から科学技術功労者として表彰されました。

科学技術庁は当時、総理府の外局として科学技術に関する行政を所管していた行政機関で、歴代の長官には三木武夫、中曽根康弘、佐藤栄作など、後に総理大臣となった政治家も名を連ねています。その科学技術庁が科学技術や産業の発展・普及に貢献し、科学技術の振興に功績をあげた人物を表彰したのが科学技術功労者表彰です。

また、長谷川はこの前年の1981年にはブラジル連邦政府から「グラン・クルーズ勲章」(大十字章)を授与されています。当社は1974年10月、ブラジルに現地法人「ハリマ・ド・ブラジル」を設立し、生松やにの採取とそれを原料とするガムロジンの生産を始めていました。ブラジルはそれまで、国内で消費する年間約3万トンのロジンすべてを輸入に頼っていました。しかし、当社が現

地でロジン生産に取り組んでからブラジルのロジン産業は発展し、現在では世界最大の輸出国となっています。

その礎を築いた当社のトップである長谷川に、ブラジル政府が感謝の思いを込めて勲章を授与したのです。ちなみに長谷川はこの8年後の1989年には、同国政府から外国人に授与される勲章としては最高の荣誉とされる「南十字星賞」を受章しています。

「松への恩返し」として 松籟科学技術振興財団を設立

松やに事業を通じて長年にわたって社会に貢献したことが、期せずして日本とブラジルの両国政府から認められたことは、長谷川にとってこの上ない喜びでした。そして科学技術功労者として表彰された翌年の1983年3月12日、松籟科学技術振興財団を設立したのでした。

財団名に冠された「松籟」とは「松の梢にふく風」という意味の言葉です。このときの思いについて長谷川は後にこう述べています。



1982年、科学技術庁
長官賞を授与



1981年、グラン・クルーズ勲章(大十字章)を受賞した長谷川末吉夫妻(左)



ブラジルにて、生松やにの採取の
指導を行う様子



「私は、いつかは奨学制度をつくって松の科学をより発展させていきたいと考えていた。私を育ててくれた松、ともに長い道を歩んできた松への恩返しである。科学技術功労者賞の受賞は、奨学制度に踏み切る格好の機会であった」

※①長谷川末吉「松籟やまず」172p

また、財団設立の趣意として長谷川はこうも記しています。「近年、わが国の科学技術は、自主技術開発への努力を積み重ね、世界に誇る数多くの技術を創出し、確実な地歩を固めてまいりました。しかしながら科学技術全般に視点を移しますと、とかく成果を期待する余り、応用技術に直接結びつかない研究を軽視する傾向があり、基礎科学の立ち遅れが内外より指摘されております。このような時代の要請を踏まえ、松籟科学技術振興財団は、科学技術に関する、調査・研究、国際交流に対する助成などを行い、全地球的な科学技術の振興に貢献しようとするものです」

並々ならぬ覚悟を持って 年商の1%を設立時に拠出

現在、財団の基本財産は10億円以上ありますが、設立時の基本財産は2億円でした。財団設立を報じたある新聞は「ボンと基金2億円」という見出しをつけ、気前よく2億円を拠出したというニュアンスで報じましたが、実情は違いました。当時、播磨化成工業の年商は約190億円。2億円は、そのおよそ1%に相当します。経済的利潤が少ない財団にそれだけの金額を投じることは、まだまだ中堅企業の域を出ていなかった当社にとって決して容易なことではありませんでした。

実際、科学技術庁は財団設立に際し、財団の基本財産に5億円程度必要だと説明しています。それに対し、長谷川は近

い将来5億円程度に増資する旨を説明し、財団設立の許可を得たのでした。多少の無理をしても財団設立にこぎつけたいという、長谷川の並々ならぬ思いが感じられます。

財団の理事長には、元の大蔵省(現・財務省)事務次官で太陽神戸銀行(現・三井住友銀行)会長を務める石野信一氏が就任。理事には、元科学技術庁事務次官の梅澤邦臣氏、東京大学名誉教授の向坊隆氏らが就任されました。

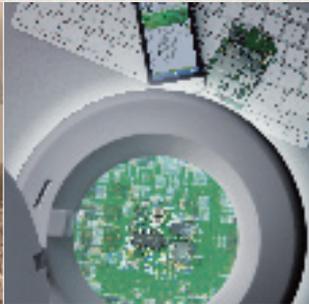
2人のノーベル賞受賞者を 助成金受給者から輩出

科学技術の振興と世界文化の発展への寄与を目標に掲げた財団は、以下の3つの事業を行うことと定めています。

- 1 研究助成事業／科学技術に関する調査・研究およびこれらに対する助成。科学技術、特に天然物の有効利用、生理活性物質、有機新素材及び電子材料など、財団の指定する課題分野において優れた研究に携わっている研究者への助成。
- 2 国際研究集会派遣事業／科学技術に関する国際交流に対する援助。財団の指定する課題分野に関し、国際学会などに参加される研究者の方へ一部費用を援助。
- 3 その他、財団の目的を達成するために必要な事業／財団の目的達成に必要な事業を行う。また、毎年研究助成を実施した研究者の業績内容を掲載した「研究報告集」を刊行し、関係方面および希望者へ配布。

このうち、研究助成事業では1983年度の第1回目で7名の研究者にそれぞれ100万円の研究助成金を贈呈しました。以後、

創立40周年を迎えた 松籟科学技術振興財団の歩み



毎年15~20件の規模で助成を続けてきましたが、そのなかには、1986年度(第4回)の野依良治氏、1991年度(第9回)の鈴木章氏という2人のノーベル化学賞受賞者の名もあります。

「プロスタグランジン類の合成」という研究テーマで助成を受けた野依氏は当時、名古屋大学の教授で、その15年後の2001年にノーベル化学賞を受賞しました。また「生理活性物質合成を指向した選択的炭素-炭素結合形成反応」という研究テーマで助成を受けた鈴木章氏は北海道大学の教授で、2010年にノーベル化学賞を受賞しています。



野依 良治 博士

真の科学技術創造立国となるために

1986年 第4回研究助成
2001年 ノーベル化学賞受賞



鈴木 章 博士

理科教育への支援が日本のサイエンスのレベルを上げる

1991年 第9回研究助成
2010年 ノーベル化学賞受賞

長谷川末吉の遺志を継ぎ 科学技術への貢献は続く

ハリマ化成が発行する技術系季刊誌「HARIMA QUARTERLY」の巻頭連載企画「時代への羅針盤」にお二人はご登場いただいたことがあります。

2015年発行の122号でお話を伺った鈴木氏は、日本が多くの

ノーベル賞受賞者を輩出してきたことに触れた後、松籟科学技術振興財団への期待を述べられました。

「実は私は60歳くらいのとき、ハリマ化成の松籟科学技術振興財団から助成金をいただいたことがあります。(中略)ハリマ化成はケミカル領域の企業ですが、今後もぜひ、ケミカルに限定せず幅広い分野でのサポートを期待します。日本のサイエンス全体のレベルアップのために、それはとても重要なことなのです」

一方、2016年発行の126号と127号の2回に分けてご登場いただいた野依氏は、次のように語っています。

「未来を担う若い研究者たちにはもっと広く世界や社会を見てほしい。そして人類文明の存続のために力を揮って欲しいのです。ハリマ化成も松籟財団の助成活動などを通じて、志ある若い研究者の支援、育成に一層努力していただきたいと思っています」

このように松籟科学技術振興財団は優れた科学研究や国際交流への助成を続け、2013年には公益財団法人に移行し、2022年度に創立40周年を迎えました。そこで記念事業として助成金の上限を1人300万円に拡大し、26人の研究者の方に贈呈いたしました。これにより助成を受けた方は累計で792人、助成金の総額は8億7090万円に達しました。

現在、世界は環境問題、エネルギー問題、持続可能性などさまざまな課題を抱えており、その解決に向け、科学技術の一層の進展が求められています。松籟科学技術振興財団は創立者・長谷川末吉の遺志を継ぎ、これからも全地球的な科学技術の振興に貢献してまいります。

松籟科学技術振興財団 2022年度 研究助成金採択者一覧

課題A:「植物有用成分およびバイオマス資源の高度利用に関わる研究」

米山 香織

愛媛大学
大学院農学研究科
特任准教授

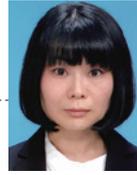
強毒根寄生雑草の自殺発芽誘導
活性物質に関する研究



皆川 真規

山形大学
大学院理工学研究科
准教授

固体担持ビスマス触媒の創製と植物
由来アルコール類を原料とした触媒的
ヘテロ環合成とフロー反応系への展開



仙石 哲也

静岡大学
学術院工学領域
准教授

抗がん性テルペンラクトン類を網
羅する可視光応答型標識化反
応の開発



原 康雅

千葉大学
大学院薬学研究院
助教

植物および微生物資源からの脂
質酸化を介した細胞死を制御す
る天然物の探索



木下 奈都子

筑波大学
生命環境系
助教

植物の腺性毛突起で高付加
価値テルペノイドを生成させる



崔 宰熏

静岡大学
学術院工学領域
准教授

シロイヌナズナにおけるフェアリー
化合物の生理的役割の解明



松本 崇弘

九州大学
大学院工学研究院
准教授

光エネルギーを利用する海洋バイ
オマスからのグリーン水素製造



宮崎 翔

東京農工大学
グローバルイノベーション研究院
助教

植物ホルモンジベレリン合成をや
めた植物の成長制御機構の解
明とその応用



草野 修平

理化学研究所
環境資源科学研究センター
研究員

植物バイオマスの飛躍的増産に
向けたケミカルバイオロジー



田中 勉

神戸大学
大学院工学研究科
准教授

希少植物由来「香り」のサステイ
ナブル生産プラットフォーム構築



高橋 俊介

東京電機大学
理工学部
助教

微生物育種による植物アルカロイ
ド医薬品の創出



岩崎 崇

鳥取大学
農学部
准教授

植物由来ヒスチジンリッチ分子を
活用した植物機能改変技術の
開発



伊藤 晋作

東京農業大学
生命科学部
准教授

植物内生プロゲステロンの機構
解明とその応用



柴田 紗知

福山大学
薬学部
講師

自己免疫疾患予防効果を発揮す
る植物由来成分の探索と作用機
序の解明



課題B:「エレクトロニクス複合材料および次世代実装に関わる研究」

津留崎 陽大

大阪公立大学
大学院理学研究科
准教授

二次元半導体デバイスへの分
子ドーピングを志向した含リン三
次元 α 共役化合物の創製



春日 貴章

大阪大学
産業科学研究所
助教

「土に還る」土壌含水率センサ
デバイス及びセンシングシステム
の開発



矢崎 亮

九州大学
大学院薬学研究院
助教

有機系材料のアップグレードを
可能とする重水素化反応開発



課題C:「持続可能な社会を実現する有機系新素材およびその機能化に関わる研究」

斎藤 慎彦

広島大学
大学院先進理工系科学研究科
助教

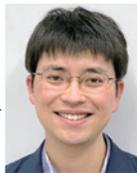
シーラー太陽電池を指向し
た新規n型低分子材料の開発



権 正行

京都大学
大学院工学研究科
助教

高耐久性アモルファス発光体
を利用した固体センシング発光
材料の開発



須田 理行

京都大学
大学院 工学研究科
准教授

非貴金属水電解触媒への応
用を志向したキラル共有結合
性有機構造体の創製



倉科 佑太

東京農工大学
工学研究院
准教授

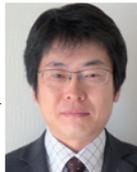
超音波の周波数で制御する音
響応答性ハイドロゲルマイクロ
複合材料の生成



桑折 道済

千葉大学
大学院工学研究院
准教授

昆虫の発色機構から学ぶ外部
刺激で色調変化する金属光
沢材料の開発



浅子 壮美

理化学研究所
環境資源科学研究センター
上級研究員

スピロビリジンの機能開拓:豊
富な炭化水素資源の効率の
かつ選択的官能基化



田原 圭志朗

香川大学
創造工学部
准教授

有機蛍光色素への電気学的な
保護基の導入と中間種の分解
抑制による電気化学発光の増強



稲田 飛鳥

宮崎大学
工学教育研究部
助教

高強度を有する新奇ペプチド
ハイドロゲルの創製と医療材料
への応用



岡 弘樹

大阪大学
大学院工学研究科
助教

リサイクル可能なオール有機多
孔質材料の創製と低濃度CO₂
の分離・回収



研究助成 及び 国際交流派遣事業募集要項

(2023年度 募集要項)

研究助成事業

研究課題

課題 A

「植物有用成分およびバイオマス資源の高度利用に関わる研究」

課題 B

「次世代エレクトロニクス材料および実装技術に係る研究」

課題 C

「持続可能な社会を実現する有機系新素材およびその機能化に関わる研究」

応募資格

国公立大学、国公立研究機関

あるいはそれに準ずる研究機関に所属する常勤の研究者

年齢制限: 45歳以下とする(原則)

助成金総額

助成金総額: 3,000万円程度

1件当たりの助成額: 200万円

研究助成金交付についての選考手続き

手続きの概要は以下の通りですが、詳細については、7月前後に更新するホームページをご確認ください。

募集期間: 2023年7月21日～9月30日

選考審査: 課題ごとの選考委員による1次審査を経て、12月に開催する選考委員会にて採択テーマを最終決定します。採択結果は、年内に応募者に連絡し、助成金は2024年3月に給付します。

国際交流派遣事業

詳しくは財団のホームページをご覧ください。

公益財団法人 松籟科学技術振興財団 ホームページ

<https://www.shorai-foundation.or.jp/>



財団の概要

名称	公益財団法人松籟科学技術振興財団 Shorai Foundation for Science and Technology
所在地	大阪府大阪市中央区今橋4丁目4番7号
設立	1983年3月12日 2013年4月1日 公益財団法人へ移行
理事長	長谷川吉弘
目的	当財団では、科学技術に関する調査・研究・国際交流に対する助成・奨励を行うことにより、科学技術の振興と世界文化の発展に寄与することを目的としています。
事業	<ul style="list-style-type: none">研究助成事業国際研究集会派遣事業その他、当財団の目的を達成するために必要な事業

役員と評議員 (2022年7月1日現在)

理事長	長谷川吉弘	ハリマ化成グループ(株) 代表取締役社長
理事	井上 明久	城西大学 理事長特別顧問
	酒井 清孝	早稲田大学 名誉教授
	楠 裕之	奈良国立大学機構 理事長
	中條 善樹	京都大学 名誉教授
	中島 邦雄	政策研究大学院大学 名誉教授
監事	金城 照夫	ハリマ化成グループ(株) 代表取締役専務
	住田 裕子	弁護士
評議員	磯貝 明	東京大学 特別教授
	井上 佳久	大阪大学 名誉教授
	大山 俊幸	横浜国立大学 教授
	伊永 隆史	慶應義塾大学 自然科学研究教育センター 訪問教授
	柴田 武彦	理化学研究所 名誉研究員
	杉江他曾宏	兵庫県立大学 名誉教授
	西岡 務	ハリマ化成グループ(株) 常務取締役
	松原英一郎	京都大学 名誉教授
	村上 正紀	立命館大学 学長特別補佐 学校法人立命館 理事補佐

公益財団法人

松籟科学技術振興財団

Shorai Foundation for Science and Technology